訳者略歴

一九〇六年生
一九三〇年東大独文卒
東大教授
主要訳書
ヘッセ「青春は美し」
ケスラー「楽しいドイツ語」（共訳）

若きヴェルテルの悩み

定価　三五〇円

一九六〇年三月五日初版発行
一九六三年八月一〇日五版発行

訳者　©国松孝二
発行者　草野貞之
印刷者　山元正宜

発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一—五
振替東京三三二一八

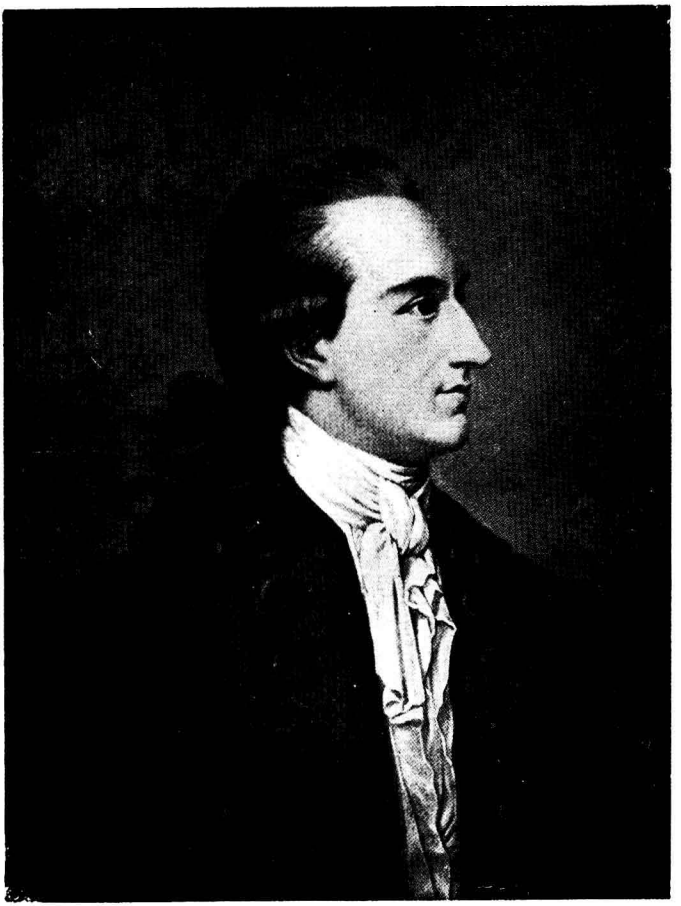
三晃印刷・大光堂製本

若きヴェルテルの悩み

ゲーテ作
国松孝二訳

白水社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



ゲーテ（1779）

目次

第一巻……九
第二巻……一〇五
編者から読者へ……一六九
訳者注……二二一
解説……二三六

きのどくなヴェルテルの身の上について、自分の目にふれたかぎりのものを根気よく収集し、ここにそれを諸君のお目にかけることにする。諸君は感謝してくれるだろうと思う。諸君はヴェルテルの精神と心情とに感嘆と愛情とを、ヴェルテルの運命に涙をおしみはすまい。

さらに、ヴェルテルとちょうど同じような胸のたぎちを感じている、やさしい心根のひとよ、きみはヴェルテルの悩みからなぐさめをくみとりたまえ。そうして、もしもなにかのめぐりあわせかわが身のおちどから、親しい友を見いだしえないときには、この小冊子をきみが友としたまえ。

第一卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一七七一年五月四日

たって来てしまったことがどんなにうれしいだろう！　親しい友よ、人間の心なんて妙なものだ！　こんなにも愛していて離れがたかったきみと別れて、しかもうれしがるなんて！　でも、きみはゆるしてくれるだろうと思う。ぼくをとらえたその他の因縁（えにし）のもつれは、まるでぼくみたいな者の心をくるしめるために、ことさら運命がえりぬいたようなものではなかったか？　そりゃ、レオノーレにはきのどくだ！　しかし、ぼくに責任はない。レオノーレの妹の個性的な魅力にぼくがここちよい楽しみを覚えているあいだに、きのどくなレオノーレの胸のなかに恋心が芽ばえたところで、それがぼくの知ったことか？　とはいっても――ぼくに全然責任がないのだろうか？　彼女の愛情にぼくが水を向けはしなかったろうか？　彼女のあくまでも真実な天真の流露を、ちっともおかしくもないのに皆してよくおかしがったものだが、ぼく自身もそれをよろこびはしなかったろうか？　ぼくはまた――ばかな、自分の身の苦情を言うなんて、人間というやつは妙なものだ！　ぼくは、愛する友よ、ぼくはきみに約束する。心を入れかえよう。いままでいつもしてきたよう

に、運命の与えた少しばかりの不幸を反芻することを、今後はもうしないことにする。現在を享受し、過去を過去たらしめよう。たしかに、きみの言うとおりだ、親しい友よ、もしも人間が――どうして人間がそういうふうにできているのか不思議千万なことだ！　――こんなに想像力をたくましくして、過ぎさった不幸の思い出を呼びかえすことに専念せずに、むしろ現在を無心に生きてゆくならば、人間のあいだにはもっと苦しみが少なくなることだろう。

たいへん恐縮だが、ご依頼の用件は首尾よくはたし、なるべく早く吉報をお知らせしますからと、ぼくの母に伝えてくれたまえ。ぼくはおばに会ったが、家郷で評判しているような悪いひとではけっしてない。快活で熱しやすいが、いかにも心のさっぱりしたひとだ。遺産の分けまえをよこしてくれぬので母が不満に思っている旨を、ぼくはおばに明言した。おばはいろいろな理由や原因や条件をあげ、その条件ならば気持よく全部をわたそう、こちらの要求以上のものをわたそうと言ってくれた――要するに、いまはこのことについて何も書きたくない。万事はうまくゆきそうだと母に言ってくれたまえ。ぼくは、愛する友よ、こんどのささいな事件にかかわってみて、どうやら誤解や怠惰のほうが奸策や悪意よりも世の中の紛争のもとだということを、ふたたび発見した。すくなくとも、あとの二つがもとになる場合のほうがまれであることはたしかだ。

ともあれ、ぼくは当地に来てしごく元気だ。この天国のような土地に孤独でおられるということ

は、ぼくの心にとって無上の気付け薬だ。それに、この青春の季節は、ともすればおびえがちなぼくの心をぞんぶんに暖めてくれる。ひとつひとつの木、ひとつひとつの生垣が花の束だ。こがねむしにでもなって、芬香の海原のなかをさまよいまわり、わが身のいっさいの栄養をそのなかに見つけだしたくなる。

町そのものは不愉快だ。しかし、近郊の自然は言いようもなく美しい。なきフォン・M…伯爵が丘陵のひとつに庭園をいとなんだのも、この美しさに心をひかれたからだ。実際、丘陵はこのうえもなく美しくさまざまに交錯しあい、無類にうるわしい谷間をかたちづくっている。庭園は簡素だ。設計したひとが造園学者のともがらではなく、ここでみずから自適しようとした風雅の持ち主であったことは、園内に足をふみいれればすぐに感じられる。ぼくはすでに、故人の愛好の場所でありぼくの愛好の場所でもある、朽ちかたむいたあずまやのなかで、幾度となく故人のために涙をながした。やがてぼくはこの庭園のあるじとなるだろう。園丁は、ほんの数日来のことだが、ぼくに好意をよせている。これはかれの身にとって不為とはならないだろう。

五月十日

不可思議な晴れやかさがぼくの魂をくまなくとらえている。それはあたかも、全心をかたむけて

甘やかな春のあしたを味わうに似ている。ぼくはひとりだ。そうして、ぼくのような魂にとってうってつけのこの土地で、自分の生活を楽しんでいる。ぼくは実に幸福だ、親しい友よ、やすらかな存在の感情のなかに、ぼくはすっかりおぼれきってしまっている。おかげで芸術のほうがだめになってしまった。いまのところ絵などかけそうもない。一筆もかけそうもない。それでいて、この刹那ほどぼくが偉大な画家であったことはない。大好きなあたりの谷間が霧らい、日の目のとおらぬまっくらな森の表面に中天の太陽がいこい、ただ幾条かの日ざしが聖堂の奥処に忍びこんでくる。そうしたときにぼくは、たぎってながれる渓流のほとりの草深いところに横たわって大地に身をよせ、そこに数限りないくさぐさの小さな草に目をとめる。その草の茎のあいだの小さな世界のうごめき、小さな毛虫や羽虫のきわめつくしがたい無数の姿を、自分の胸にまぢかく感じる。そうして、ぼくたちをおのれの像にかたどって創りなした全能者の遍在、永遠の歓喜のうちに身をうかべながらぼくたちをにないささえてくれる大慈者のいぶきを感じる——友よ、やがてぼくの双眸の周囲が暗くなり、あたりの世界と天とが恋人のおもかげのようにすっかりぼくの魂のなかにやすらいでしまう。そんなとき、ぼくはしばしば胸いっぱいになってこう思うのだ。「ああ、こんなにもゆたかに、こんなにも熱く胸中に生きている思いを再現できぬものか、画仙紙に映しだしえないものか、そうして、なんじの魂が無限なる神の鏡であるように、それがなんじの魂の鏡となるように

できぬものか！」――友よ――しかし、ぼくは圧倒されてくずおれてしまう。壮麗なこれらの現象の威力に押しひしがれてしまう。

五月十二日

まやかしの霊がこのあたりに出没するせいなのか、それともぼくの胸にやどる激しい霊妙な空想のせいなのか、ぼくにはわからないけれども、周囲のいっさいのものがぼくには実に楽園のような感じがしてならない。町を出はずれたとっつきのところに、ひとつの噴井がある。ぼくはメルジーネとその姉妹たちのようにこの噴井から離れられない。――小さな丘をくだって行くと、ひとつのアーチの前にでる、そこを二十段ばかり下へ降りてゆくと、その下に澄みきった清水が、大理石の岩間からわき出ているのだ。上部をかこんで井筒をつくっている低い石枠、そのへん一面をおおっている高い木々、あたりにみなぎる清涼の気、それらすべてにどことなく人をひきつけ人をとらえるところがある。ぼくは毎日欠かさず、ここにすわってひとときをすごす。そうすると、町の少女たちがやって来て水をくんでゆく。この上もなく罪のない仕事だが、またこの上もなく必要な仕事で、以前は国王の姫君たちも手ずからなさった仕事だ。すわってながめていると、族長時代の光景が身のまわりにまざまざとよみがえってくる。かれら族長たちがみな噴井のほとりでなじみに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com